# 現代語訳
# 論語と算盤

渋沢栄一

守屋淳＝訳

https://coredou.com/

# 処世と信条

# 論語と算盤

論語は算盤によってできている。論語もまた、算盤の働きによって、本当の経済と結びついている。
だからこそ、論語と算盤は、とてもかけ離れているように見えて、実はとても近いものである

「和魂漢才」・・日本独自の精神と中国の学問を併せ持つ(菅原道真)
日本人たるもの、日本特有のヤマト魂を基盤としなければならない
中国は国も古いし、文化も早くに開けており日本より一日の長がある
中国の文化遺産や学問もあわせて習得して、才能を養わなければいけない。
「論語」がその中心になっている。

「士魂商才」・・武士の精神と商才の才覚とを併せ持つ(渋沢栄一)
人の世の中で自立していくためには武士のような精神が必要。
武士のような精神ばかりに頼って商才がなければ経済上のうえからも
自滅を招く。士魂とともに商才がなければならない

# 人にはどうしようもない逆境

「人にはどうしようもない逆境」とは、立派な人間が真価を試される機会に他ならない

逆境に立たされた場合「自分の本分(自分に与えられた社会での役割)」だと
覚悟を決めるのが唯一の策である。

現状に満足することを知って、自分の守備範囲を守り
「どんなに頭を悩ませても結局、天命(神から与えられた運命)であるから仕方がない」
とあきらめがつくならばどんなに対処しがたい逆境にいても心は冷静さを保つことができる

「人の作った逆境」に陥ったらどうすればいいか
ほとんど自分がやったことの結果なので、自分を反省して悪い点を改めるしかない。
世の中のことは、自分次第の面も多く、自分から「こうしたい、ああしたい」と本気で頑張れば、だいたいはその思い通りになるものである

# 立志と学問

# 精神の向上を富の増大とともに進める

徳川300年の間は武力による政治
この時代に教育された武士のなかには、レベルが高く視野の広い気質や行いの持ち主も少なくなかった

明治は物質文明の進歩により、国の豊かさは増大
しかし、人格は明治維新前よりも退歩。消滅すらしかねない
物質文明が進んだ結果、精神の進歩を害した

# 自ら箸を取れ

普通以下の人
才能や気概、胆力や智謀を見出す先輩や環境がないと、その手腕を発揮するきっかけがつかめない

手腕があり、優れた頭脳がある人
官庁にも、会社にも、銀行にも、人がたくさん余っているくらいである。
上の人間が「これなら大丈夫」と安心して任せられる優秀な人物ならいくらでも欲しがっている

人材登用のお膳立てをして待っているが、この用意を食べるかどうかは
箸を取る人の気持ち次第でしかない

木下藤吉郎も主人の織田信長に養ってもらったのではない。
自分で箸を取って賤しい身分から身を起こして、関白という大きなご馳走を食べた

誰が仕事を与えるにしても、経験の少ない若い人に、初めから重要な仕事を与えるものではない
藤吉郎のような大人物であっても、初めて信長に仕えたときは、
草履取りというつまらない仕事をさせられた

些細なことを粗末にするような大雑把な人では、しょせん大きなことを成功させることはできない

# 立派な人間の争いであれ

何があっても争いを避けて世の中を渡ろうとすれば、善が悪に負けてしまうことになり
正義が行われないようになってしまう。

人間がいかに人格が円満でも、どこかに角がなければならない。

# 常識と習慣

# 常識とはどういうものか

社会で生きていくとき、常識はどんな地位にいても必要であり、なくてはならないものである
常識とは学術的に解釈すれば

## 「智、情、意(知恵、情愛、意志)」

＜智＞
知恵が十分に発達していないと、物事を見分ける能力に不足してしまう。物事の善悪や、プラス面とマイナス面を見抜けないような人であればどれだけ学識があったとしてもよいことをよいと認めたり、プラスになることをプラスだと見抜いてそれを採ることができない。

＜情＞
知恵が人並以上に働く人は何事に対しても、その原因と結果を見抜き、今後どうなるかを見通せるものだ。
見通した結果までの筋道を悪用し、自分がよければよいという形でどこまでもやり通してしまう。
他人に降りかかってくる迷惑や痛みなど、なんとも思わないほど極端になりかねない。
そのバランスの悪さを調和していくのが「情」である。

＜意＞
「情」には瞬間的に沸き上がりやすいという欠点があり、悪くすると流されてしまう。
喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、愛しさ、憎しみ、欲望といった7つの感情は、その引き起こす変化が激しい。
感情をコントロールするのは強い意志に他ならない。
「意」は精神活動の大木ともいえるものである

# 習慣の感染しやすさと、広まっていく力

習慣とは、人の普段からの振舞いが積み重なって身に染みついたものだ。
自分の心の働きに対しても習慣は影響を及ぼしていく。
誰しもが普段からよい習慣を身につけるように心がけるのは、人として社会で生きていくために大切なこと

習慣はただ一人の身体だけに染みついているものではない。他人にも感染する。
感染する力というのは、単によい習慣ばかりでなく、悪い習慣についても当てはまる。
だから多いに気を付けなければならない

一度習慣となったら、それは身に染みついたもので終生変わることがない。幼生のころから青年期までは
最も習慣が身に付きやすい。この時期によい習慣を身につけ、それを個性にまで高めたいものである

習慣は老人になっても重視しなければならない。青年時代に身につけた悪い習慣でさえ、
努力すれば改められるものである。

今日のように、日々新たな気持ちで社会に臨まなければならないとき、
「自分に克つ」というこころをもって身を引き締めていかなければならない

# 意思の鍛錬

誰が見ても正しい道理を押し立てられて、言葉巧みに誘導されると知らず知らずのうちに、
自分の日頃の主義主張とは正反対の方向に誘導され足を踏み入れてしまう羽目になる。
こんな状況に直面しても、無意識のうちに自分の本心をなくされてしまわないようにする必要がある。

頭を冷静に保って最後まで自分を見失わないようにすることが
「意思の鍛錬」である

「意思の鍛錬」は相手の言葉に対して、
常識に照らし合わせながら自問自答する

＜例＞
「相手の言葉に従うと、一時は利益を得られるが、あとで不利益が起こってくる」
「この事柄に対しては、こうきっぱりと処理すれば、目先は不利でも将来のためになる」

「意思の鍛錬」には常識が必要である。
常識的な判断を取り違えたまま「意思の鍛錬」をしていくと悪事のための意思が固くなってしまう

# 仁義と富貴

# 本当に正しく経済活動を行う方法

実業とは利潤をあげていくことに他ならない
利潤をあげ、物質的な豊かさをもたらさなかったら商工業など無意味になってしまう

しかし「自分の利益さえ上がれば、他はどうなってもいい」と考えていたら
「人から欲しいものを奪い取らないと満足できなくなる」といった事態になる

本当の経済活動は、社会のためになる道徳に基づかないと決して長く続くものではない

思いやりをもって世の中の利益を考えると、「利益を少なくして、欲望を去る」「世の常に逆らう」
といった考えに走りがちだが、そうではない。

自分の利益が欲しいという気持ちで働くのが、世間一般の当たり前の姿でもある。社会のためになる道徳だけ
では世の中の仕事というのは少しずつ衰えてしまう。

「物事を進展させたい」「モノの豊かさを実現したい」という欲望と
社会の基本的な道徳をバランスよく推し進めていく道理を
ぴったりとくっつけ実践に移していく

# 貧しさを防ぐために真っ先に必要なもの

自分が苦労して築いた富であっても、その富が自分ひとりのものだと思うのは大きな間違いである

人はただ一人では何もできない存在であり、国家社会の助けがあって、初めて自分でも利益が上げられ
安全に生きていくことができる。

富を手にすればするほど、社会から助けてもらっていることになる。

だからこそ、この恩恵に恩返しするという意味で、貧しい人を救うための事業に乗り出すのは
むしろ当然の義務であり、出来る限り社会のために手助けしていかなければならない。

「高い道徳を持った人間は、自分が立ちたいと思ったら、まず他人を立たせてやり、自分が手に入れたいと思ったら、まず人に得をさせてやる」

という『論語』の言葉のように、自分を愛する気持ちが強いなら、その分社会もまた同じくらい愛していかなければならない

# よく集めて、よく使おう

一般的にお金は大切にしなければならない。
貨幣はモノを代表することができるのだから、モノと同じく大切にすべきである。

お金は社会の力をあらわすための大切な道具でもある。お金を大切にするのはもちろん正しいことだが、
必要な場合にうまく使っていくのもそれに劣らずよいことなのである。

よく集めて、よく使い、社会を活発にして、経済活動の成長をうながすことをぜひとも心がけてほしい

よく使うとは正しく支出することであって、よい事柄に使っていくことを意味する

金遣いの荒い人間にならないよう努力し、守銭奴にならないように注意すべきである。

# 理想と迷信

# 熱い真心が必要だ

どんな仕事でも趣味のようにワクワクするような面白みを持たなければならない

仕事をするさい、単に自分の役割を決まりきった形でこなすだけなら、命令に従って処理するだけに過ぎない。

趣味を持って取り組んでいけば「この仕事は、こうしたい、ああしたい」「こうやって見たい」「こうなったら、これをこうすれば、こうなるだろう」というように、理想や思いを付け加えて実行していくに違いない。

人として生まれたからには「趣味」を持ってほしい。
社会になかで一人前の「趣味」を持ち、趣味のレベルが上がれば、それに見合った成果が世間にももたらされるようになる
そこまでいなかくても趣味のある行動であれば、必ずその仕事には心がこもるに違いない。

# 人格と修養

# 人格の基準とは何か

人が動物と異なる点は、道徳を身につけ、知恵を磨き、世の中のためになる貢献ができるという点にある。これによってはじめて真の人だと認められるのである。

「動物のなかで最も進歩した証としての能力を持つ者だけが、人の真価をもっている」

中国の古代、周の時代には文王と武王という親子が非道な殷王を懲らしめて天下を統一、道徳に基づく政治を行った。その結果、後世、文王と武王ともに道徳の高い聖王だとの評価を受けている。

ひとつの小国すら手に入れることができなかった孔子は富や地位という面から評価すれば文王、武王と雲泥の差があるが聖人としてあがめられている

人を評価することは難しい。

その人が何を実践しているのかを見て、どの動機を観察して、その結果が社会や人々の心にどのような影響を与えたのかを考えないと人の評価などできない。

富や地位、名誉のもととなった「成功か失敗か」という結果を二の次にし、よくその人が社会のために尽くそうとした精神と効果とによって人の真価というのは評価されるものである。

# 実際に効果のある人格養成法「忠信孝悌」

「忠」・・良心的であること
「信」・・信頼されること
「孝悌」・・親や年長者をうやまうこと

「目的を達成するためには手段を選ばない」といったように成功の意義を誤解する人もいるが、素晴らしい人格をもとに正義を行い、正しい人生の道を歩み、その結果、手にした豊かさや地位でなければ完全な成功とは言えない。

# 教育と情誼(じょうぎ)

# 現代教育の得たもの、失ったもの

江戸時代までは少数でもいいから、偉い者を出すという天才教育であった。
今は多数の者を平均して教え導いていくという常識的教育になっている。

昔の青年はよい師匠を選ぶということにとても苦心していた。よき師匠を選んでその学問を習い、徳を磨いた

現代の青年は師匠を尊敬しない。学校の生徒など、その教師をまるで落語家か講談師のようにみている。「講義が下手だ」、「解釈が劣っている」とか、生徒としてあってはならないような口を利いている。

昔は自分の心を磨く、心の学問ばかりだったが、いまは知識を身につける学問ばかりになっている。自分を磨いたら、家族をまとめ、国をまとめ、天下を安定させる役割を担うという、人の踏むべき道を教えていた。

今の教育は知識を身につけることを重視した結果、精神を磨くことをおざなりにして、心の学問に力を尽くさないから、品性の面で青年たちに問題が出るようになってしまった。

「昔の人間は、自分を向上させるために学問をした。今の人間は、名前を売るために学問をする」

ただ学問のための学問をし、「これだ」という目的がなく、なんとなく学問をした結果、実際に社会に出てから「自分は何のために、学問をしてきたのだろう」と疑問に襲われる

底の浅い虚栄心のために、学問を修める方法を間違ってしまうと、その青年自身の身の振り方を誤ってしまうだけでなく、国家の活力衰退を招くもとになってしまう。

# 成敗と運命

# 成功と失敗は、自分の身体に残ったカス

人を見るときに、単に成功したとか、失敗したとかを基準にするのはそもそも誤っている
人としてなすべきことを基準として、自分の人生の道筋を決めていかなければならない。

悪運に助けられて成功した人がいようが、善人なのに運が悪くて失敗した人がいようが、それをみて失望したり、悲観したりしなくてもいい。成功や失敗というのは、結局、心をこめて努力した人の身体に残るカスのようなもの。

人は、誠実に努力し、自分の運命を開いていくのがよい。もしそれで失敗したら「自分の智力がおよばなかったため」とあきらめることだ。逆に成功したなら「知恵がうまく活かせた」と思えばよい。

成功したにしろ、失敗したにしろ、お天道様から下された運命にまかせていればよい。
たとえ失敗してもあくまで勉強を続けていれば、いつかはまた、幸運にめぐまれるときがくる。

正しい行為の道筋は、天にある陽や月のように、いつでも輝いていて少しも陰ることがない。
正しい行為の道筋に沿って物事を行う者は必ず栄えるし、それに逆らって物事を行うものは必ず滅んでしまう。